

慧能撰『金剛經解義』について（竹内）

慧能撰『金剛經解義』について

竹内弘道

六祖慧能に『金剛經』の注釈書が存することは、古くは大中八年に記された智証大師円珍の『福州温州台州求得經律論疏記外書等目錄』（T・五五—一〇九四a）に「能大師金剛經訣 一卷」とあることよって知られているが、また政和五年（一一一五）に覺範慧洪も、『題六祖釈金剛經』（『石門文字禪』卷二五所収）の中で、この書の伝布が未だ広まらざるを思い、自ら清信の檀越を化し版に鑿って印施したと記している。さらに万松行秀の『從容錄』卷四（T・四八一—二六三c）の中には、『六祖口訣』に云くとして、この書からの引用が見られるのであるが、この『從容錄』中の引用は、正統藏一—三八—四の『金剛經解義』二卷、唐慧能解義、又云金剛經注解、又云金剛經口訣（以下『金剛經解義』と略称）に一致するところが、関口真大博士の『禅宗思想史』（昭和三九年）の中で指摘されている。『金剛經解義』はかつて『六祖口訣』とも称されて、慧能の撰述として一般に流布していたことが知られるのである。関口博士はこの書の中でさらに、同じく正統藏の、一一九—二一一の『金剛經口訣』一卷、唐慧能説が、実は先の『金剛經解義』の末尾に附された羅適の手になる元豊七年（一一八四）の『六祖口訣後序』千七百七十余字のうち、末尾の五百余文字を削ったものに他ならぬことを指摘され、あわせて、正統藏中の『金剛經解義』の『金剛

經』の本文が、長慶二年（八二二）の靈幽法師による經文の補填を経ていない鳩摩羅什訳であり、その点でこの書が古色を存していることを示唆されている。さて『金剛經解義』に関する書誌学的研究は、このような統藏經を中心とした関口博士の研究によって大きく進展することとなったのであるが、その後、この成果を踏まえ、駒沢大学禅宗史研究会編著『慧能研究』（昭和五三年）の中で詳細な異本研究がなされ、現存する資料に関しては一応の結論を得たと言えよう。これによって明らかになったことは、『金剛經解義』の古い伝承が確かめられ、過去に唱えられた『六祖口訣後序』の撰者羅適の偽作説は完全に成立しなくなつたことであり、六祖の思想は序と注解に見い出されるべきであるということである。また、この書の成立は、『金剛經』の本文に長慶二年の靈幽の附加がなされる以前であることが一層確かめられたということである。

こうして『金剛經解義』の書誌学的問題が整理解明されたことによつて、その思想内容の検討が今後の課題となつてくるのであるが、この点に関してのこれまでの経過を振り返つてみることにする。『金剛經解義』の研究は実質的に関口博士の前掲書に始まつたと言つても過言ではなく、その後のいくつかの博士の論文の中でも一貫して、その研究の必要性が力説されている。その趣旨は、これまでの禅宗史、禅思想史の研究においては、慧能撰とされるこの書に言及するものがほとんどなく、慧能の思想は『六祖壇經』（以下『壇經』と略称）のみを中心として研究されている。その『壇經』も成立には古くから疑問が持たれ、弟子である神会（しんけい）の所説に「同一人の筆致と見えるまで共通一致して」おり、慧能の思想の根本を『壇經』においてとらえるか『金剛經解義』においてとらえるか真

劍に研究されるべきであり、偽撰であるならばその理由を明らかにする必要があるというものである。このような観点に立つて『金剛経解義』と敦煌本『壇経』を比較した結果、その思想の共通点としては、両者、自性清浄心を説いて、見性の頓悟を示し、禪宗をして全く『金剛経』による般若波羅蜜たらしめ、あわせて大乘の無相戒を説いている点があげられ、相違点としては、『壇経』の「無念為_レ宗、無相為_レ体、無住為_レ用」と言い、不立文字の趣意では前者より後者が勝り、さらに『壇経』では『金剛経解義』に全くない三科三十六対の法門があることが指摘されている。関口博士の後に続く最近の研究としては中川孝先生の論文がある。ここでは興聖寺本『壇経』と『金剛経解義』の思想用語とを比較対照し、傍証として『神会語録』も用いてその類似点を挙げ、『金剛経解義』を六祖の真撰と結論づけている。以上のような思想的研究においては、関口博士は、敦煌本『壇経』を神会の手になるものと見て『金剛経解義』と比較し、それによって六祖の真意を探ろうとしているところに、また中川孝氏は、興聖寺本『壇経』と『神会語録』とを根拠として比較し、しかも類似点のみの指摘にとどまっているところに、両者の問題点が指摘されよう。敦煌本『壇経』は現存する『壇経』としては最古の形態を有するものであり、慧能の研究は敦煌本を第一とすべきであろうし、その成立に神会が直接関与したとする説には疑問が持たれている。同様な理由により『神会語録』との共通性を以って慧能真撰の傍証とすることにも疑問が持たれる。

ここでは偽撰、真撰の問題はひとまず置き、『金剛経解義』、敦煌本『壇経』及び神会の著録中に見られる主な思想用語について、そ

慧能撰『金剛経解義』について(竹内)

の対応関係を見てゆくことにする。まず関口博士が指摘された、自性清浄心、見性の頓悟、『金剛経』による般若波羅は三者に共通である。また定慧等とする点も一致する。しかし無相戒の思想は神会にはなく、『壇経』と『金剛経解義』にのみ共通である。「無念為_レ宗」とする無念の思想は神会と『壇経』に共通するが『金剛経解義』にはないと言えよう。一行三昧の語も神会と『壇経』にのみ共通であるが両者は思想内容を異にしている。また無情に仏性無しとする点も神会と『壇経』は一致し、『金剛経解義』は「一切有情無情、皆有_レ仏性」としている。三科三十六法門は『壇経』にのみ存する思想である。このように、一見近似した多くの思想表現を有しながら、重要な点で三者は全く異った要素を持っていることがわかるが、ここで『金剛経解義』が無情に仏性有りとしている点は重要である。むしろ『壇経』とも神会とも異った系統においてこの書は撰述せられたのではないかと考えられる。この時代、無情有仏性を唱えた人としては、同じく慧能門下の南陽慧忠が著名であるが、この点に関しては更に厳密な検討を要すると思われる。

- 1 『尚直編』巻下、空谷景隆(一三九二—一四四三)著。
- 2 『慧能研究に関するメモ』(昭和四七年、印仏研二〇—二二)「曹溪慧能の『金剛般若経解義』について」(『新羅仏教研』昭和四八年)。
- 3 『禅学思想史』P一三一。
- 4 『慧能研究』P二九五。
- 5 同上P四一九。
- 6 『金剛経口訳』と『六祖壇経』(禅文化研究所研究紀要九、昭和五二年)。
- 7 『初期禅宗史書の研究』柳田聖山著、P一五三等。
- 8 拙稿「荷沢神会考」(『宗学研究』第二四四号、曹洞宗宗学研究所発行昭和五七年)。
- 9 『慧能研究』P四四四。

(駒沢大学大学院)